

## 1000年後の未来へ

毎日新聞 2013年11月12日

都鳥拓也・伸也兄弟は、私と同郷の若き映画製作者だ。盛岡市の児童養護施設をテーマにした「葦牙-あしかび-」（2009年）や秋田県の自殺対策活動を記録した「希望のシグナル」（12年）といった、良質なドキュメンタリーで知られている。

被災県である岩手で活動する映画製作者として、都鳥兄弟もまた、震災といやおうなしに向き合うこととなった。しかし、彼らはずいぶん、被災地に直接カメラを向けることはなかった。

そんな彼らの新作のタイトルは「1000年後の未来へ-3・11保健師たちの証言-」。元々はNPO法人公衆衛生看護研究所の菊地頌（うた）子事務局長からの依頼による、映像資料作りのための記録撮影だった。都鳥監督は、140時間に及ぶ記録映像を編集し、すぐれて独自の視点から一本のドキュメンタリー映画を作り上げたのである。14年3月の公開に先駆けて本作を鑑賞する機会があった。



映画は震災で殉職した9人の保健師たちを弔う保健師像の除幕式からはじまる。日本独自の発展を遂げてきた保健師という制度は、地域に密着して住民の健康を守る伴走者だ。自らも元保健師である菊地事務局長は、被災地で保健師が果たした特異な役割の記録を残すべく、都鳥兄弟を伴って被災地を巡る旅に出る。

石巻では、いまなお多くの被災者が生活する仮設団地を回り、コミュニティーをつなぐ集会「大門町なぎさの会」の活動が紹介される。

津波で壊滅的な被害を受けた岩手県大槌町には、発災直後に全国から保健師が自発的に集まり、全戸家庭訪問調査が行われた。マニュアルが通用しない被災地では、タテ割りの縛りが比較的少ない保健師たちが、専門性にとらわれない多彩な支援活動に従事していたのだ。

津波被害に原発事故が重なった福島県では、多くの住民が他の自治体に避難して生活している。避難先での保健師の業務は、予防接種からメンタルヘルスまで多忙を極める。被災した自治体や住民にこれから求められているのは「自立」。日常回復の試みが徐々に進められている。

ひとつ印象的だったのは、岩手県田野畑村の元保健師、岩見ヒサさんの活動だ。かつて、この村の明戸地区に原発の建設計画が持ち上がった。1981年のことだ。岩見さんは地域住民の健康を守るべく、婦人会の役員を集めて反対運動を組織し、その甲斐（かい）あってか計画は撤回された。明戸地区も津波被害は大きく、もし原発が建設されていたらと想像するだけにぞっとする。



それにしても、保健師という職業の業務範囲は実に幅広い。専門性があいまいで業務独占も持っていないことが逆に「強み」となるのだ。地域の保健サービスの担い手のみならず、専門職のコーディネーターとして、保健ニーズを掘り起こすモニターとして、多彩な活動が可能となる。

加えて彼女たちには強い使命感がある。ある元保健師はいみじくも「保健師は死ぬまで保健師」と言い切った。困っている人たちを目の当たりにすると「保健師の何かが騒いでいてじっとしてられなくなる」のだ、と。この使命感と連帯感が

あればこそ、彼女たちは互いにすぐに打ち解け合い、親密な情報交換ができるのだろう。

被災地を巡る旅を終えた菊地さんは語る。「いくら健康度を高めても津波であつという間になくなったら意味が無い。災害の問題も含めて考えるのが保健師の仕事」なのだ、と。政治と制度の空隙（くうげき）を埋める、こうした無名の活動によって、日本の今は支えられている。 （さいとう・たまき＝精神科医、筑波大教授）＝毎月1回掲載します